平成29年度文学研究科修士論文要旨

『スッタニパータ』アッタカヴァッガについて
――「優塡王経」と「子父共会経」を中心に――

文学研究科宗教学仏教学専攻　仏教学仏教史学研究（Ⅰ）専修　NGUYEN THANH NHON

パーリ語経典の中で『スッタニパータ』（以降 Sn と省略），『ダンマパダ』，『サンユッタニカーヤ』が特に古層にあたると言われている。また，Sn を見ることで最も直接的に仏陀の世界を深く理解できると言える。中でも，Sn の第 4 章（アッタカ・ヴァッガ，以降 Av と省略）と，第 5 章（パーラーヤナ・ヴァッガ）は，最も古いと考えられている。一方，北伝の大蔵経では，Sn の第 4 章だけが漢文に翻訳されている。それは『義足経』という経典である。近年，日本では『義足経』が漢文から現代語に部分的には翻訳されているが, 全訳は存在しない。拙論では，『義足経』第 2 経「優塡王経」と第15経「子父共会経」を中心に考察した。これらは Sn の第 4 章の第 2 経 Guhaṭṭhakasutta と第15経 Purābhedasutta に対応している。そこで Sn の第 4 章の第 2 経・第10経と『義足経』第 2 経・第15経を現代語訳し，両経典の内容を比較対照する。また，これらが同一の原テキストによるものか否かを調べるために，それぞれの経典の異同を比較した。

Av で Guhaṭṭhakasutta は第 2 経である。Guhaṭṭhakasutta は 8 偈から成る。Guhaṭṭhakasutta には因縁物語がないが Av の註釈書の Pj には説かれている。Guhaṭṭhakasutta に対応している漢訳経は『義足経』第 2 経「優塡王経」である。「Guhā」とは「洞窟」の意味であり，「aṭṭhaka」は「八つの」の意味である。「Guhaṭṭhaka」は「洞窟についての八つの偈」という意味。「Guhaṭṭhakasutta」は第一経の欲望（Kāma Sutta）のテーマを続けている。「Guhaṭṭhakasutta」は第 1 経の欲望を基礎において，発展的に述べる内容になっている。欲望を制し，激流を渡る聖者はこの世もあの世も望むことがない。この経典には 3 つの非常に鮮明な喩えがある。欲望は, 洪水のように私たちを引き離す。水が不足している魚のように苦しみという結果をもたらす。矢が体につきささるようなものだ。

「優塡王経」は優塡王と沙門を争う因縁物語をもとに経の題名が付けられている。Guhaṭṭhakasutta と「優塡王経」の因縁物語の内容がだいたい同じであるが詳しく見ると相違するところがある。

Av においては Purābhedasutta は第10経である。Purābhedasutta には因縁物語がないが Av の註釈書の Pj には説かれている。「Purābheda」は二つの言葉の組み合わせであり，「purā」とは「前」，「bheda」は「破壊」，「区分」という意味である。これにより「Purābheda」は「破壊の前」や「死の前」となる。Purābhedasutta は14偈から成る。第 1 偈は仏に対して「どのように見る者が，どのように戒ある者が，「寂静なる人」と言われるか」という質問であり，第 2 偈から第14偈にて世尊がそれに答える形式をとっている。聖者とは渇愛を離れ，過去にも未来にも今にも執着することがない。また，聖者とは怒らない，怖れない，自惚れない，悔いることなく，そして言葉を慎しむ。寂静者はすべての欲望を超えて，何にも縛られることはない。持物が何もなくても悲しみはなく，諸々の法（見解）に赴かない人は「寂静者」と呼ばれる。

Purābhedasutta の偈が相当する経は『義足経』の「子父共会経」第15である。Purābhedasutta と「子父共会経」では因縁物語の内容がまったく異なっている。「子父共会経」では，成道一年後で仏が初めてカピラ城の王父と家族を訪問し，釈迦の家族全員は厳粛に仏を迎えることから始まる。仏は悦頭檀王（父王）と釈迦族たちのために説法する。Purābhedasutta では，世尊は神々の大集会で説法する。神々は心の中で疑問を生じたが，世尊に質問しない。世尊は神々のために自身の化身を作り，その化身が世尊に質問し，世尊がこの経を説く形式である。

「子父共会経」には25偈ある。しかし，第 1 偈から第11偈は『中本起経』上巻の「還至父国品第六」と共通の部分がある。Purābhedasutta の偈が相当するのは第12偈から第25偈である。また，相当する偈の順序では，850偈と851偈の順序が一致しない。

以上の両経の相違点は伝承する過程で発生したと筆者は考えている。最初に，世尊は金口を通して法を説かれた。弟子たちは偈の形でそれを伝承していた。当初は両経が偈文のみであったろう。部派に伝わったとき，部派の教理に基づいて因縁物語が加えられたであろうと推察する。もちろん，『義足経』は支謙が 3 世紀頃に訳したものであり，その漢語の使用は非常に古く，意訳する場合もあり，さらに中国思想の影響もあろう。

以上のような，部派仏教時の因縁物語の挿入，翻訳上の問題点を考慮からはずせば，両経を繋ぐ「世尊の真の教えを説く経典の存在の可能性」を指摘することが可能であろう。

宗教と大麻
――比較宗教学の視点から――

文学研究科宗教学仏教学専攻　宗教学宗教史学研究（Ⅰ）専修　糸　川　定　伸

本稿は，宗教と大麻の関係について，ジャマイカの宗教運動のラスタファリズムと日本の神道の二つの事例の検討を通して論じる試みである。その検討を通じて，大麻の宗教的な機能の多様性を明らかにしたい。

ジャマイカはカリブ海に浮かぶ島国の中で三番目に大きく，日本の秋田県とほぼ同じ面積である。そこで暮らす人口の90％以上が黒人種で，17世紀以降，アフリカから奴隷貿易で強制輸送されて来た人々を起源とする。ラスタファリズムは，この黒人解放運動のなかで生まれた宗教である。この宗教の信奉者であるラスタファリアンは，大麻を神の草として主にガンジャと呼ぶ。このガンジャを吸引することによって神秘体験をし，自らのなかに神を宿すよう陶酔していった。さらにガンジャそのものも，反抗の象徴として用いられた。大麻の覚醒作用による神秘体験を行う宗教は，ほかにも事例が多くあるが，この反抗の手段としてのガンジャの使用は，ラスタファリズム独自のものである。

神道における大麻の利用は，もともと罪を祓い，穢れを清めるための道具である幣（ぬさ）が麻でつくられていたことに起源をみることができる。それが「麻」「大麻」と書かれたが，時代とともに「おおあさ」「たいま」と呼ばれるようになった。近代では「神宮大麻」（じんぐうたいま）と呼称されるが，伊勢神宮などの神社から出されるお札をさす。その他にも注連縄や鈴縄など，多くの宗教的な素材に大麻繊維の仕様がみられる。さらに，それだけに限らず衣類や紙，下駄の鼻緒から畳の縦糸など，日本人にとっての大麻は，歴史も古く身近で生活にも溶け込んだ文化的素材であったといえる。

これらの比較研究の視座からみえてくるものは，同じ大麻であっても，吸引の薬物として使用するか，大麻繊維で祓いの道具を作るかで，相当に異なるという点である。ラスタファリアンには，ガンジャがなくてはならないものにまで高まったのと対照的に，日本人にとっての大麻は，第二次世界大戦後のGHQの政策なども影響し，麻薬というイメージが大きくなり，祓いの効果を込めた道具の素材は，大麻でなくてもよくなっていった。地域に伝わる大麻に関する慣習や風習も含め，科学的根拠のないものとして消滅しつつある日本の現状は，どこか寂しさを感じる。これは，農作物としての大麻栽培という視点に立ってみても同様である。第二次世界大戦前は1万から2万ヘクタールあった栽培が，2015年には約6ヘクタールにまで激減している。

そのなかでもあえて共通性を求めると，一つの機能がみえてくる。ガンジャを吸引し神秘体験をしたラスタファリアンは，自分の中に神を見いだし，自己を神聖化する。「神宮大麻」は祓いの道具であり，場を祓い神聖化しようとする。注連縄は社や御神木の結界をしめし，聖域を区画する。つまり，神聖化する手段，何を神聖化するかは異なるが，大麻が神聖化に関わる植物であることを二つの事例によって確認できた。

そして宗教の意義も，その「神聖さ」にこそ現れると考える。目には見えない神聖を人は求め，それを様々な方法で具現化する。そこには信じる心を必要とし，それが，信仰や信心という人間の文化的価値を生み出す。その実践こそ宗教のもつ意義であろう。

これは，大麻によってラスタファリズムはコミュニティを，日本はそのムラやイエをといった結びつきを大切にするという，共同体の安定や安寧にも繋がる。宗教文化のなかで用いられる大麻は，神聖という機能を有することによって，様々なカタチ無きものをカタチ作っていく。今後，さらに大麻を神聖な植物として研究を進めることで，宗教というカタチのないものの輪郭を浮き上がらせていく作業につなげたい。

最後に，本稿は賛否に限らず大麻に関わる事実を正しく理解し，宗教という文化的視点から考察するものである。大麻の是非や善悪を判定するものでもなければ，嗜好品用や医療用大麻の解禁を求める活動に寄与するものでもない。純粋に，失われていく大切な文化を守りたいという想いと，宗教の常識をくつがえす力を信じて研究していくものである。

日本人の椿観
――宗教との関り――

文学研究科宗教学仏教学専攻　宗教学宗教史学研究（Ⅰ）専修　澤　田　洋　子

本論文は，神社・修験道・茶華道・家紋などの諸分野において，椿と宗教との関りを総合的に研究した試みである。この目的は，日本人の椿観にある矛盾した二面性（親しみと畏れ）がもつ意味を明らかにすることにある。

椿の概要において，本論で扱うヤブツバキはツバキ属中の日本固有種で，その分布は，北は青森，南は台湾の北端にまでおよぶ。古代より，日本人はヤブツバキを生活用品に使うばかりでなく，芸術・文化に取り入れ親しんできた。このツバキの表記は，はじめ「海石榴」と表記されていたが，文字として「椿」が「ツバキ」を表すようになったのは，『万葉集』からである。しかし『古今集』以後，和歌などに登場しない負のイメージがうかがわれる時代がつづき，室町期より発展した茶華道により新たな見方をされるまで，800年あまりの期間を要した。椿の爆発的なブームは江戸時代に江戸でおこり，最古の椿文献とされる『百椿集』をはじめ，『百椿図』などの文献もさかんに発行されたが，明治にはいると椿の人気は下火になった。一方，江戸期には欧米に椿が渡っており，「冬のバラ」として大ブームを生んでいた。第二次大戦後これが刺激となって「日本椿協会」が結成され，椿の研究・普及が取り組まれ，椿愛好家団体による活動ばかりではなく，椿を町おこしに利用する自治体もある。

宗教との関りでは，ツバキ社の存在がある。ツバキ社としたのは，「椿」の字を使う神社と使わない神社があるためで，両社はどのような違いがあるかを比較した。「椿」を冠する神社の主なる特色に椿樹・鉱山・塩との関係がみられ，山側に鎮座地がある場合が多い。逆に「椿」の字を冠さない神社には海・舟・塩などと関係があり，海岸や河口に建つという特色があった。どちらのツバキ社でも共通することは，祭神に猿田彦が多いことと，塩であった。塩は牛馬や人力で海岸から山奥に運ばれたことから，双方のツバキ社の特色に，塩が登場したと考えられる。それではなぜツバキ社に猿田彦を祀るかであるが，それは猿田彦の神徳にあった。猿田彦は「道ひらきの神」とされている。それゆえ，その神徳は水陸交通の安全と商売の発展に結びつき，双方のツバキ社に猿田彦を祀ったと推測できる。一方で，椿の字を使用しない神社の祭神がすべて猿田彦であるのに対し，椿を冠する神社系の約半数は，必ずしも猿田彦一辺倒ということではなかった。次にツバキ社ではない神社を取り上げた。「椿八幡社」「南宮社」「水天宮」における祭神・神木・神紋を検討し，共通点と相違点を明らかにした。

他方で「修験道」では注目すべきことが多数あった。椿大神社では，役の行者の師とされる行満大明神を祀っており，羽黒修験・白山修験・金峯山修験では，修験の行事や修行に関連があった。

「仏教」では，寺社名や法名・戒名の他，荘厳，灯明油などに仏教との関りがみられ，「キリスト教」では隠れキリシタンが護符や信者達の供養に使っていた。年中行事・茶華道・家紋・伝説にも宗教性が顕著で，めずらしい祭りが継承されているばかりでなく，芸術面・精神面で椿の存在は大きかった。中でも茶道においては，臨済宗の僧である栄西によって宋代の喫茶法がもたらされ，現在でも宗教性が深い。華道も仏前の供花より発展したものである。他方で椿を使わないことで，宗教性をうかがわれることもあった。家紋は植物紋が多いにかかわらず，椿を使用する家はほとんどなかった。椿伝説では多くの事例を集めたデータから，はっきり畏れが裏付けられた。では，なぜ椿かということであるが，儀式・神話・伝説などから，椿は霊木であるという認識が存在していることにある。

以上のように，椿は多方面に宗教と関りがあることは証明されたが，花首がまだ美しいうちから落ちることから，怖れが重なり，縁起が悪いとする思考が現在も根強くのこっている。しかしながら，椿は忌み花として嫌われているわけではない。三重県の正月の参拝者数は，伊勢神宮に次いで椿大神社が2番目に多い。ここに，椿のもつ親しみと畏れの二面性がみてとれる。椿の字が神社の名称に冠されたのは，日本人の心が椿の美しい花と葉に，未来への明るい彩りを託したとも考えられる。けっして怖れているわけではない。親しみと畏れ，これが「日本人の椿観」であろう。その椿観が，さまざまな宗教と関わることになっていったのである。

織田信長政権の成立過程に関する一考察

――永禄・元亀年間を中心に――

文学研究科歴史学専攻　日本史研究(Ⅱ)専修　大　脇　浩　平

織田信長に関する研究は，従来の研究を再検討し，史料を精査・検討することにより，新たな成果が多く生まれてきている。信長個人の面だけに留まらず，朝廷・将軍との関係，桶狭間合戦などの軍事行動に関する実態研究，流通・都市政策の見直しなど，多角的な方面から研究が深められている。その結果，「革命児」や「英雄」的視点で語られていた信長像が見直され，現実的政治家としての信長像が出てきている。また，信憑性の高い史料に基づいた著書などが出版され，研究成果が一般の多くの人にも知られるようになり，そういった信長像が世間にも浸透しつつある。ただし，信長に関する研究は論点も多く膨大な数に上っており，それに伴い，多くの意見が発表されていて，未だ定説をみない事象が多く残されている。

そこで本論文では，信長が中央政権への進出を目指す画期となった永禄・元亀年間に注目した。その中でも特に重要な出来事である「美濃攻め」「将軍義昭との関係」「他大名との外交関係」の三点に着目した。これを通して，信長の政治的立場を再検討することとした。

第一章では，信長の家督相続から美濃攻略までを取り上げた。信長は天文二十一年頃に家督を相続し，永禄三（1560）年に今川義元を桶狭間にて破り，織田一族の統一と尾張国内の支配を固めることに成功した。そして中央政権進出のため美濃攻めを開始した。信長が美濃への侵攻を開始したのは永禄四（1561）年で，美濃の中心となる稲葉山城を取り囲む支城を次々と落としていった。その結果永禄九（1566）年には，稲葉山城を孤立させていたようである。そして信長が稲葉山城を落城させ，美濃統一を果たしたのは永禄十（1567）年の七月頃と推定できる。その証拠として信長はこの頃に義昭と連絡をとっており，美濃へと義昭を招待しているからである。

第二章では，将軍義昭との関係を取り上げた。義昭との関係は従来までは信長の傀儡政権であったとの見方が一般的であったが，現在では多角的な方面からの両者の立場や人的環境などを再検討することにより，両者の関係は傀儡ではなく，義昭は一定の権力を保持・行使することができたとされている。しかし，未だ両者の関係性は確証を見ていないのである。そこで本章では，信長・義昭の立場について考察を加え検討した。まず，上洛にあたっての主体は義昭にあったと言える。信長自身も他大名に宛てた書状の中で自身を義昭に供奉する存在であると明言している。そして入洛し義昭が将軍になってからも信長は義昭に危機が及ばないようにと努めている。しかし，それが義昭には煩わしくなってしまったようであり，最終的に両者は敵対関係へと陥ってしまう。敵となった義昭を信長は京都から追い出すことにするが，再三信長は義昭に帰京するようにと連絡している。このことから信長にとって義昭は必要な存在であったに違いないのである。また，この行動からして傀儡という姿は見えないのである。

第三章では，この時期における他大名との関係に注目した。そして大名の中でも「上杉謙信」「武田信玄」「三好氏と松永久秀」らに絞った。彼らに絞った理由は，信長との関連が多かった大名たちであることと，史料の残存量が多いことから，信長の外交に関して，かなり信頼度の高い検討が展開できると考えたからである。結果，信長と他大名の関係の多くは，だれかを媒介にして繋がっていたことがわかった。上杉謙信や三好氏らは義昭を媒介として，信玄との関係は主に家康を媒介として繋がっていた。義昭や家康は信長と同盟を結んでいた。彼らと同盟を結んでもらうことにより，間接的に自身との関係も作り上げることができるというように信長は立ち回っていた。しかし，それが仇となり，危機に陥ることが多々あった。信長の外交戦略はある意味では，良い面を発揮し，悪い面も発揮してしまうという表裏一体の関係にあったと考える。

信長の考えていた政権は自身が中心となるのではなく，義昭を中心としたものであった。しかし，その義昭を失ったことによりそれは崩壊し，信長自身が中心となって運営していくことになったが，信長のとっていた外交ではうまくいかなかったのである。

海保青陵の経世論

――「民」と「天理」を中心に――

文学研究科歴史学専攻　日本史研究(Ⅲ)－1専修　坂　野　徳　永

海保青陵は江戸時代後期に活躍した経世家である。経世家とは,当時の政治・社会などの諸問題について論じ,その解決策を提案した人々の事を指す。

青陵の経世論の特色は経済論である。先行研究でも経済論について取り上げたものが多い。本論では青陵が「民」に対してどのような意識を持っていたのか，青陵の「天理」はどのようなものなのかについて考察する。

第一章では，経世論において「民」がどのように位置づけられたのかを考察した。結論として青陵は「天理」と国益の論を用いて,「民」は身分が別れていても，本質的に対等な存在とした。

青陵は天子から「小民」にいたるまで「庶民」「生民」と表現し身分による序列化を意識していない。「天理」を根拠にし，人にはそれぞれ「天理」が備わっているとした。「天理」とは人の役目や使命と解釈でき，立場や境遇,能力によってその内容が変わるとした。そして「天理」の内容に身分のような差はなく，さらに「天理」を守っているかどうかで世俗的な幸福に差が生じるとしている。

次に各身分の評価についてだが，青陵は国益になるかどうかで判断している。百姓・職人・商人など国益になるものについては高い評価であるのに対し，国益になることをしていない武士や儒者などは痛烈に批判している。被差別身分に関してはこの論を使用しておらず,「夷狄」の子孫であり,「羞悪」の心がないことから「禽獣」同前と差別している。現状の身分制度の変革に繋がることのないように，こうしたと考えられる。幕藩制的な身分制度を維持しようとしたのである。

第二章では,「天理」について検討した。第一章で,青陵の「天理」を役目や使命と結論づけたが，第二章では，従わなければならない法則であり，行動した結果こうなるという必然的な意味としても使われることもわかった。

青陵は今の時代の「天理」に合うものとして『周礼』と,『書経』の「洪範」を挙げた。『周礼』では様々な職分から十分の一の運上を取ること，売買の肯定,「民」を奢侈にさせないように，各人収入にあった生活をすることなどを「天理」とした。

「洪範」では「水」の「潤下」と「火」の「炎上」の性質について述べ,これを現状の経済の循環にあてはめ,藩が「民」から貨幣や米，シロモノ（商品）などを巻き上げ，支出して「民」へ下げることを経済の循環とし正当化した。当時の社会の経済的循環は不十分で，青陵は積極的に循環しなければならないとした。これから青陵は経済に法則性があり，領主の政策により人為的に動かせることを認識し，藩は商品流通の要となり物を動かすとしている。近世においてこの発想は特筆すべきである。

また「出精」についても述べており,働いた分だけ「民」に報酬を支払うべきとした。青陵の国益は藩中心の利己的なものではなく,「民」を含めた藩などの国全体の富国を目指したものといえる。

しかし「天理」を理解するだけでは不十分で,「活智」すなわちこれを実現するための策がなければならないとした。

第三章では，経世策である産物マワシ・株敷改・枢密賞・三つ子への扶持米・施行米を検討し,「民」の位置づけや「天理」をどのように活用したのかを明らかにした。

産物マワシは藩が産物を独占的に買い上げ，京・大坂などで販売する経世策である。一見すると専売仕法と似ているが，これは一方的な搾取ではなく,「民」と相談したりするなど，藩と「民」の両方が利益を得る経世策である。さらに藩は「民」を鼓舞するために元手を貸し付けるなどさまざまな支援をすべきとした。この産物マワシは藩と「民」がいっしょになって稼ぐという姿勢であり，これまでにない新たな関係といえる。

株敷改は風俗を良くし「民」を「出精」に励ませるため，株（身分証明のようなもの）で「民」の身分を確認し，遊民を追放するための経世策である。株敷改を行う際に事前に「民」の合意が必要であると述べている。

枢密賞は国益になることをした者に与える賞で,「民」を鼓舞し,「出精」させるのである。そして風俗を良くするためのものでもある。しかし青陵は「孝」など道徳的な行いをした者に賞を与えることには否定的である。

青陵は「民」への援助も行うべきとしている。三つ子のいる家庭では子育てが大変なことから扶持米を与えるべきとし，災害の被災者には救米を与えるべきとした。ただし働かない生活困窮者に施行米を与えることは認めないとしている。

青陵の経世策には「天理」が関わっている。青陵の「天理」は経世策を正当化したといえる。

幕末老中制度の変容過程

――「在府」・「在京」・「在坂」老中をめぐって――

文学研究科歴史学専攻　日本史研究(Ⅲ)－2専修　鈴　木　乙　都

本論文では，幕末期，江戸から京都・大坂にわかれていった老中制度が，どのように変容したのかを論じる。1863（文久3）年から1868（慶応4）年にかけて，将軍が江戸を離れる現象が生じた。本論文では，上記の間，江戸・京都・大坂と空間的にわかれて滞在することとなった老中が，従来の制度をどのように変容させ，それが明治以降の近代行政機構にどのように関係するのかを論じる。

幕末政治史の研究では長州藩・薩摩藩を中心とした雄藩の研究が先行しており，幕府内部へ言及した研究は手薄な状況である。また，政局が京都に移ったという見方から，例えば「一会桑政権論」のように，朝廷や在京雄藩に焦点があてられ政治構造が論じられてきた。しかし，老中に関しては江戸に残って外交・財政などの執務をおこなっていた者もおり，彼らを含めた江戸・京都・大坂を包括した広い視野での政治構造を検討する必要があると考えられる。

本論文で使用した中心史料は，「水野家文書」と『諸事留』である。前者は，老中水野忠精に関する日記・書簡が収められている。水野は，幕末期の老中の入れ替わりが激しい中で，1862年から1866年まで長く老中を勤めた人物であり，また上洛御供・留守の両方を経験した人物であるため，考察するのに適した人物として本史料を用いた。また後者は，江戸城御用部屋（老中の執務室）に残った記録である。当史料には，江戸・京都・大坂にわかれた老中たちが互いに送った往復書簡がいくつか収められており，執務実態を解明するのに好史料である。

本論文では，将軍が江戸を離れている期間を，主に上洛ごとに区分して，それぞれにおける老中制度変容の画期を明らかにした。まず1862年の文久幕政改革によって，政事総裁職など徳川家門の介入が見られた。翌1863年の上洛では，迫る外交問題への対応策を考えておらず，また将軍還御の延期によって在府老中は苦境に追い込まれた。同年5月の小笠原卒兵上京事件は，上記のような背景も惹起の要因となっていた。翌年の2度目の上洛では，国是を定める会合に臨む在京老中と，天狗党の乱や外交に対応する在府老中とで役割がわかれた。「秘翰」に見られるように，書簡によってリアルタイムでの情報共有と，忌憚ない意見を述べる合議をおこない，また執務の一部では，在府老中は緊急の場合に限定しながらも江戸のみでの裁可がおこなわれるなど，制度の画期が見られた。元治国是の定まった後は，京都において一会桑の三者を中心に，政局が論じられてきた。しかし，老中稲葉正邦は朝廷の意向を受けて将軍還御の後も京都に留まっており，以降，京都に在京老中が駐在するようになった。1865年の進発では，江戸・大坂間で，案件によって執務をおこなうシステムが定着し長期の将軍不在に耐え得る，安定した制度へと変容した。徳川慶喜は将軍就任後，近代国家の萌芽と評される慶応幕政改革において，江戸に総裁を集め執務をおこなわせ，自身は総裁職でない老中板倉勝静を供として畿内において各問題を対処した。改革の基礎は，慶応元年の安定した江戸・大坂間の執務システムであった。

幕末，政局は京都・大坂に移らざるを得なかった。老中は将軍の度重なる上洛と共に江戸・京都へ空間的にわかれることを経験し，執務システムを変容させることで対応していった。国是など政局に関わることを在京老中が担い，日々の執務や横浜などでおこなわれる外交は在府老中が担った。そして，形成された新しいシステムは，近代国家につながる専制に影響を及ぼしたのである。

太平洋戦争の推移と日本海軍の戦争指導体制の変容過程

文学研究科歴史学専攻　日本史研究(Ⅲ)－2専修　横　山　泰　章

本論文は，太平洋戦争開戦（1941年12月）～レイテ沖海戦敗退（1944年10月）に至るまでの日本海軍（以下，海軍）の戦争指導体制の変容過程を，推移する戦局への対応を軸に検討することで明らかにしようとした。

第1章は，前史として，1941年4月の海軍人事異動～同年12月8日の開戦に至る過程を扱った。4月人事によって成立した「五人会」（大臣・次官・軍務局長・次長・第一部長）は「避戦」を模索し続けたが，作戦計画上のタイムリミットが「避戦」を許さない段階に至り，時の海相であった嶋田繁太郎が「海軍の意志」（総意）としての開戦を決定したことが明らかになった。軍令部・連合艦隊の作戦に関する意見は尊重されたが，最終的な開戦する／しないの判断は海相に求められた。また，陸海軍対立を避けようとする海軍の姿勢は開戦過程により顕著に現出し，「国家意志」としての開戦決定を促進したことが明らかになった。

第2章は，攻勢期～拮抗期にあたる，開戦～1942年9月1日の大東亜省設置問題までを扱った。ハワイ作戦の成功によって連合艦隊の発言力が高まり，ミッドウェー海戦敗退などの戦局悪化は連合艦隊に反省を迫るどころかむしろその要求を先鋭化させることとなった。また，連合艦隊の位置上昇にともなって東条内閣における嶋田海相の位置が上昇したことも明らかとなった。

第3章は，守勢期にあたる，1943年9月30日の第2回戦争指導大綱の策定～1944年3月31日の古賀峯一長官以下連合艦隊司令部員遭難（海軍乙事件）を経て同年5月3日に豊田副武が後任長官に就任するまでを扱った。連合艦隊の要求は中央において陸海軍間の深刻な対立＝航空機配分問題を引き起こしたが，陸海軍大臣の統帥部長兼任と海軍乙事件にともなう連合艦隊司令部再編成により嶋田の下に海軍部内の全権力が集中し，このことによって陸海軍の「協調」が進んだことが明らかとなった。

第4章は，守勢期にあたる，1944年6月20・21日のマリアナ沖海戦敗退～同年10月25日のレイテ沖海戦に至る過程を扱った。嶋田海軍首脳部下の陸海軍「協調」はサイパン放棄を決定したが，このことによって「戦局打開運動」が盛り上がり開戦以来の海軍省首脳部は退場を迫られ，米内光政新海軍首脳部の成立をみたことが明らかになった。また，嶋田が後継の野村直邦（1944年7月17～22日）・米内両海相（1944年7月22日～1945年12月1日）下の海軍首脳部に短期間だが軍令部総長として居残ったこと（～1944年8月2日）で，レイテ沖海戦に至るまでの作戦指導上の陸海軍「協調」が継続されたことが指摘できた。

曹操政権論

文学研究科歴史学専攻　東洋史研究(Ⅱ)専修　北　原　加　織

従来，曹操政権は魏晋貴族制との関りで論じられてきた。豪族共同体論と私的紐帯結合から論じた川勝義雄の論説は貴族制を考えるうえで非常に重要な位置をしめる。しかし，川勝が曹操政権の中核に「潁川・北海グループ」という臣下集団があるとするのには疑問が残る。矢野主税はその寄生官僚制説で，太祖廟に配祀された人々を曹操政権の中核と規定し，彼らの出身地が潁川に限らず各地方に分散していることを提示し，「潁川・北海のグループ」の人的ネットワーク機能について疑問を呈している。本論はこの矢野の指摘を踏まえ「潁川・北海グループ」の中心人物である荀彧と，従来の研究では軽視されている董昭やその他の兗州人士を史料より抽出し，曹操政権の人的構成について再考を試みた。

これまで「潁川・北海グループ」が，曹操のターニングポイントに深く関わっているとされてきたが，史料から曹操の転機たる兗州牧就任，天子奉戴，魏公就任・魏王即位を実際に動かしたのは潁川でも北海でもなく董昭をはじめとする兗州人士であることが判明した。また，董昭以外にも鮑信・張邈・陳宮などを中心とした兗州人士は潁川人士よりも先に曹操に仕えている。鮑信はごく初期に戦死し，また張邈・陳宮は後に曹操に反旗を翻すが，曹操政権のごく初期段階においては，劉岱に変えて曹操を兗州牧に据えるなど，荀彧をはじめとする潁川人士より力を持っていたと推測される。曹操を最初に兗州牧と認めたのは荀彧ではなく，これら兗州人士であった。

これらのことから，曹操政権の人的構成を見るうえでは，初期譙沛集団や「潁川・北海グループ」という特殊なグループのみから見るのではなく，曹操が最初に本拠を確立した兗州における兗州人士集団の参加も見落としてはならない。曹操政権の膨れ上がりも，「潁川・北海グループ」たる漢王朝の清流ネットワークの参加により飛躍的に伸びたと考えるよりは，孫呉政権，蜀漢政権の広がりと同様に，まず出発点たる譙沛軍団より始まり，反董卓連合軍瓦解後の兗州牧時の兗州人士，兗州反乱時に退避した許における潁川人士の吸収，官渡の戦いにおける北海人士の吸収，そして，赤壁の戦い直前の南下における劉表配下の荊州人士の一部の吸収というように，各地に根拠を移したのち，その地の個人を吸収，もしくは各地の軍閥を倒すごとにその軍閥配下にあった個人を吸収したと考えるのが妥当である。こうして吸収した集団のなかから才覚のある個人が個人として曹操政権の中核を担った。それは唯だ才を愛した曹操の性質と合致するのではないか。曹操を支える臣下の出身地は多様であり，曹操政権の構造は，川勝が論ずるような郷党的政権というよりは，矢野が唱える寄生官僚制的な超郷党的政権と考えられる。

従来の研究において曹操政権の中心的構成員が，清流派「本流」のネットワークの要である荀彧と一枚岩であるというイメージ論に縛られすぎていることは問題である。「潁川・北海グループ」という政権運営に関して理念や方向性をまったく同じくした者のネットワークがそのままに曹操政権にとりこまれ，曹操政権の中核を形作ったというのは，曹操政権の成長過程の部分的な現象の一つに過ぎないのである。華北の中心地を占めた曹操政権は後漢以来の所謂名士と呼ばれる層を多く吸収している点は孫呉政権，蜀漢政権とは異なる。しかしそれら名士層は曹操政権の中核としてのグループを形成していたわけではない。

曹操が掲げた政治の理想は二つの側面を見せる。一つは『唯才論』にみられる実利的な側面であり，もう一つは儒教的な『周礼』に則った側面である。天下収攬には時に覇道が必要とされ，曹操はその覇道ばかりを注視され『三国志』に法術家として記される。しかし曹操は儒教による王道をまったく排斥したわけではない。彼が目指したのは覇道と王道の両立の道であり，それは『世語』によればかつて兗州人士の陳宮が曹操に示した方向性であった。「覇王」を，「覇王」ではなく「覇」と「王」と読む用例は，『漢書』元帝紀に見える。陳宮が曹操に示した「覇王之道」の「覇王」とは，「覇王」ではなく「覇」と「王」すなわち，覇道と王道のことであるならば，それは，曹操が目指した理想の国家像と一致することになる。

しかし，『三国志』はこれら実際に中核にあった兗州人士を退けて，潁川人士を曹操政権の中心に据え，曹操の唯一無二の忠臣であったはずの荀彧が曹操によって憂死したことを殊更に悲劇的に描き出す。『三国志』が司馬氏を後漢清流派の流れをくむ潁川人士の推戴を受け，法家主義を掲げる曹操政権から政権を奪還するものとして描いていることにその原因がある。

中国共産党幹部陳毅の思想と実際活動

文学研究科歴史学専攻　東洋史研究（Ⅱ）専修　龔　　雯

陳毅は，第一次世界大戦後に中国の革命へと身を投じた。その時，中国革命は何度も危機に陥り，転換期を迎えており，陳毅は闘争の最前線に立って敵と戦った。そして最終的に中国の「十大開国元帥」の一人と称されるようになる。

ところで，陳毅の人生は四つの主要な段階に分けられる。第一に陳毅の青少年期，第二に日中戦争期，第三に国共内戦期，第四に戦後および文化大革命時期である。

まず，少年時代の陳毅であるが，どのような新しい文化思想を受け，革命の道を選んだのか。この新しい文化思想と，少年時代の経歴は大きな関係がある。

第二，日中戦争期の古田会議，三年ゲリラ戦争，黄橋戦役，皖南事変，黄花崗事件など，長期にわたる革命闘争の経験が陳毅を鍛えた。この時の軍隊経験を生かし，部隊での作戦を行う遂行能力を大幅に高めていたといえよう。長期にわたるゲリラ戦争を行うことによって，陳毅は華南に根拠地を建立するための基礎を作った。1941年皖南事変が起こった原因は黄橋事件に対しての国民政府による報復行動であるとしている。これは，国共合作の約束に明確に違反している。だが，中共統帥部は最初から最後まで断固として国共合作を守り，黄河以北では衝突を免れている。

第三, 国共内戦期での陳毅の経歴で看過できないのは，主に孟良崗戦役，渡江戦役を指揮したことであろう。この時期の陳毅は，豊富な部隊作戦の経験を生かし，孟良崗戦役に勝利した。これにより華東戦局は陳毅側が優勢となり，国民党軍を打ち破ることとなる。国民政府軍の五大主力部隊のトップとして整編第74師団が存在したが，この戦いで全滅し，師長である張霊甫は戦死した。かくして，陳毅は「百万軍の中で上将の首級を取った」との称賛を受けた。また，渡江戦役でも人民解放軍が大きな勝利を手にした。そのため，平和か戦闘か，この2つの選択が可能な場合は人民解放軍は総力を挙げて戦うとし，その結果，自分たちを不動の地位に立たせた。その後は共産党軍の進軍が加速し，新たな中国を確立させたといえよう。

文化大革命時期の陳毅も批判を受けた。「文化大革命」はまさに厄災であった。それは陳毅だけではなく，数万人もの人々を無実の罪で死の淵へと追いやり，数万もの家庭を塗炭の苦しみへと落とし入れた。こうして，陳毅は「二月逆流」事件に巻き込まれてしまった。すなわち，外交事務部門での陳毅批判大会の後，陳毅は誣告され，外交部長の職務も事実上解任された。そして，外交部による「91人の大字報」事件が発生した。このように，文化大革命時期の陳毅は弾圧された。にもかかわらず，浩然正気と革命楽観主義の精神を非常に強く保持し，人の敬服を集めた。

遺憾なことに，文化大革命時期が終焉を迎える前に，陳毅は病逝した。文化大革命時期の弾圧によって陳毅は体調をこわしたと私は考えている。陳毅の名誉回復は死後である。

初代駐日イギリス公使ラザフォード・オールコックの人物交流

――江戸幕府との外交交渉の背景――

文学研究科歴史学専攻　西洋史研究(Ⅱ)専修　榊　原　真　希

初代駐日イギリス公使オールコック（Sir Rutherford Alcock）は，外科医から転身した異色の外交官である。地方の日本社会の実情を自ら視察することを試みた外交官であり，3 年間にわたる体験と日本観は，彼の主著『大君の都』に詳しく記述されている。

開国後，急速に発展する対外貿易は，日本国内の経済に多大な影響を及ぼした。輸出超過と金の流出により諸物価が急騰し，一般庶民や下級武士たちは生活に困窮するようになり，日本国内に排外的な空気が広まった。

日本人による外国人殺傷事件が相次いで起こり，幕府側は江戸に近い横浜の防衛が困難になったことに対し危機感を抱いた。幕府側は，開港場を横浜から他の場所へ移転可能かどうか模索するようになった。また，通商条約に期限が規定されている江戸・大坂の開市及び新潟・兵庫の開港を延期することを，条約締約国に打診するようになった。オールコックは，開市開港延期の提議に対し，自国政府に建議することを拒否したが，幕府側の意向を伝達する全権使節を派遣したらよいと発言した。これにより，日本の外交政策に新たな局面が開かれた。しかし東禅寺事件後，オールコックが海兵を上陸させて公使館の衛兵隊としたことから，イギリスが戦争を仕掛けてくる可能性について，幕府は憂慮する事態となった。

幕府から招かれて江戸に滞在していた医師で日本研究家のシーボルト（Philipp Franz von Siebold）は，東禅寺事件発生直後に長男を伴い，怪我人の救護にあたった。シーボルトは，現場の状況やオールコックらの様子を幕府に迅速に報告するとともに，日本と西洋諸国の習慣の違いから双方に誤解が生ずることがないように腐心した。

公使館への襲撃を未然に防げなかった幕府側は，事件後の外交交渉においてイギリス側に押し切られる形となっていった。また，幕府の外交政策がイギリス寄りに路線転換した背景には，少し前に起きたロシア軍艦対馬占拠事件も影響していた。イギリス側は，東インド・中国艦隊司令官が対馬に赴き，ロシア軍艦長に退去を要求することを提案したが，老中安藤信正は，そのことについては，すでにロシア領事に依頼済みと返答した。しかしイギリス側は，幕府からの依頼ではなくこれを行うとし，幕府は，イギリス側の動きを黙認するしかなかった。

また幕府は，シーボルトに対し，ロシア側に友好的に仲介してほしいと依頼していた。しかし，イギリス側の抗議後に，ロシア軍艦が退去したことから，イギリス単独の力で対馬事件は解決したという印象を国内外に与えた。

オールコックは，世界最大の経済的・軍事的勢力を有するイギリスに依存することの重要性を力説し，彼の発案による遣欧使節は，開市開港延期を承認する「ロンドン覚書」の調印に成功した。オールコックは「大英帝国」の威信を保つために，妥協的態度をとることはなかった。しかし，日頃は他国人と一線を画して交流していたようにみられるオールコックも，シーボルトの長男を日本語通訳とし，日本人通訳の森山多吉郎をロンドンに同行させるなど，周囲との交流を重視していたことがわかり，その人柄は親切であると評されている。

外交の根幹は，相互の信頼であり，相互に外交使節を派遣し合うことで，対等な立場で平和に交渉を試みようとする外交の理念が，この時期に模索され形成されたという歴史的意義は大きいと考える。

縄文時代草創期における狩猟具の様相

――日本列島中央部からみたその動態――

文学研究科歴史学専攻　考古学研究（Ⅰ）専修　田　中　　良

縄文時代草創期の様相について狩猟具の変遷を通して解き明かそうとした。その視点は，信越地方と東海・近畿地方の編年を通して，編年案の構築と型式学的な比較検討を行うことである。加えて，日本列島中央部の様相と題して，信越地方と東海・近畿地方の草創期における実態を明らかにすることを目的とするものである。まず，狩猟具の形態分類を行い，尖頭器を木葉形と柳葉形，有舌尖頭器をＶ字とＴ字，石鏃を平基式と凹基式に区分し，類型化した。そして，34ヶ所の遺跡を俯瞰することで，該当する石器がどのように組み合わさっていたのかをみていき，その特徴や共通点などを導き出した。

その結果，該期をⅠ～Ⅲ段階に区分することが出来た。これらはⅠ→Ⅱa→Ⅱb→Ⅲの順に新しくなる。信越地方はⅠ段階から資料が認められるが，東海・近畿地方ではほとんどの資料がⅡa段階以降のものである。Ⅰ段階は10cm以上の大形の木葉形尖頭器を主体とするもので，重厚な作りをした局部磨製石斧，長大な石刃を組成する段階で，神子柴・長者久保文化がその代表例である。Ⅱ段階は有舌尖頭器を特徴とする段階で，中形の木葉形尖頭器と有舌尖頭器を主体とするⅡa段階，中形の柳葉形尖頭器と有舌尖頭器を主体とするⅡb段階に細分される。Ⅱa段階は信越地方では有舌尖頭器の遡源形態と目される柳葉形尖頭器やＶ字状の有舌尖頭器が認められ，東海・近畿地方では中形の木葉形尖頭器・有舌尖頭器・石鏃の三器種が基本的な組成となる。Ⅱb段階は中形の木葉形尖頭器が減少し，替わりに柳葉形尖頭器が増加する。有舌尖頭器は小形のＴ字状を呈するものが多くなる。信越地方と東海地方の一部の地域では「花見山型」と呼ばれる十字状の有舌尖頭器が顕著となるが，東海・近畿地方では依然としてＴ字状の有舌尖頭器が主体となる。ここに信越地方と東海・近畿地方の大きな差異が導き出される。続くⅢ段階は尖頭器や有舌尖頭器がほとんど認められなくなる段階で，それらに替わって石鏃が圧倒的に多くなる。このような変化は，漸移的に変化していくのではなく，急激に移り変わっていく。

以上，東海・近畿地方の編年を信越地方と比較検討することで明らかにしたが，石器群と土器群が必ずしも一致しないという点を指摘した。これは同時に，単に土器が新しいとか古いとかで石器群を判断する危うさを露呈させた。特に近畿地方では隆線文土器を伴う桐山和田から爪形文や多縄文土器を伴う上津大片刈にかけて有舌尖頭器が形態的に発達していく点を筆者は実見し，確信している。このことは，本ノ木論争でも明らかであるように，土器と石器群が必ずしも一致するとは限らない。この溝を如何に埋めていくのかを十分議論していかないと，決着を見ることはないであろう。特に，本ノ木論争では，こうした議論が土器の研究者と石器の研究者とであまり活発に行われていないように感じる。この論争に関して筆者は今回の編年案を経て，神子柴・長者久保文化直後の有舌尖頭器文化の所産であると考えている。そして，神子柴・長者久保文化にはすでに土器が共伴する事実があるため，本ノ木論争のきっかけとなった本ノ木遺跡は土器と尖頭器を伴う遺跡であると考えている。

この編年案を通じて，東海・近畿地方の様相を明らかにしたことはとても意味のあることだと思われる。特に従来の研究では東海・近畿地方の編年を全国編年と比較することはあっても他の地域編年と比較することはなかった。それを行ったことは重要な点であることだと考えている。そして，信越地方と東海・近畿地方の差異や共通点を導き出し，なぜそのような特徴を有するのか，狩猟具からできうる限り明らかにしてきた。今後はこの論文が東海・近畿地方における草創期研究の新たな起爆剤となるよう具体的な実資料に基づいて，解明していこうと思う。

後期旧石器時代における集団領域の分析

文学研究科歴史学専攻　考古学研究（Ⅰ）専修　林　　麦　人

有機質遺物の見込めない日本列島における旧石器時代研究は，石器を中心に発展を遂げてきたといえる。その初期段階は，岩宿遺跡の発見以降急速に増加した旧石器時代遺跡の発掘調査資料を基盤とした，示準石器による時間的配列に重きが置かれた編年研究であった。しかし，そうした研究情勢においても，岩宿遺跡や1959年に調査が行われた神山遺跡においては遺物のまとまりに注目しており，後の砂川遺跡で行われた構造論的分析に通ずる研究視点の萌芽が認められる。

砂川遺跡では良好な遺存状態と個体別資料分類という手法を用いて，遺跡内の接合資料の徹底的な分析を行い，剥片剥離過程の段階的な順序や方向などの復元が試みられた。この試みは，それまで静態的であった遺物の分布から，動態的な遺跡内における連続的な剥片剥離作業の復元を可能とし，続く月見野遺跡群の発掘調査などをはじめとした多くの調査で分析手法として適用され，より方法論的に整備された。そして，後の旧石器時代遺跡研究に欠かすことのできない普遍的な手法として用いられるようになったのである。

こうした砂川遺跡を契機とする遺跡構造論は，野川遺跡において石器集中部のあり方が一様ではなくそれぞれが個別の場の機能を反映しているものであるという視点を基礎としたセツルメント・パターン分析という形で実践的に導入された。この分析は，人間の行動は多岐にわたり，内容においてもそれぞれの地点や時期，文化により大きく異なるという想定から，遺跡における特定の石器や石器群のあり方は当時の生活や行動の結果であると考えたものである。こうした観点から石器集中部をいくつかのパターンに分類することで，遺跡内の様々な活動の場の復元を試みた。野川遺跡の分析はブロックの捉え方という点で月見野遺跡の事例とは異なり，ブロックの内容の質的な側面を捉えたものである。

以上の事例により，遺跡の集団の理解に対する根源的な枠組みが示され，そのような視点は1970年代に集団論としても展開を見せることとなり，方法論的指針の一つを提示するとともに，いくつかの問題点を示すこととなった。続く寺谷遺跡や野沢遺跡での分析にも用いられ，今日に至るまでの遺跡研究に多大なる影響を与えている。

こうして，旧石器時代の集落復元と集団関係に関する検討について一定の方向性が見出されている現状だが，集団領域の具体的検討については，当時の人間集団の動きを分析する視点が必要である。この点について本論文では2002年に確認された神奈川県吉岡遺跡群Ｂ区と用田鳥居前遺跡の遺跡間接合に注目し，両者の分析から当該地域における集団の行動パターンの抽出を試みた。

分析はまず，遺跡内における遺物分布と石器石材の個体別資料の検討を行った。吉岡遺跡群Ｂ区では，南北二つに別れたブロックにおいて第一石材として在地系の台地内石材である硬質細粒凝灰岩を主に使用しており，主要な器種の製作など，石核を伴う遺跡内での剥片剥離作業が集中的に行われていた。硬質細粒凝灰岩以外の台地内石材もいくつか用いられているが，いずれも遺跡内での剥片剥離作業は認められず，数点の剥片や加工痕あるいは剥片・微細剥離を有する剥片などが伴うものが大半である。同じく，遠隔地からの搬入石材である黒曜石や黄玉石なども組成しており，遺跡内での積極的な剥片剥離作業の痕跡は認められない。しかし，第一石材以外の台地内石材に対し，ナイフ形石器などの主要な器種が組成する傾向が高い。

一方で，用田鳥居前遺跡では吉岡遺跡と同様二つのブロックに分布が集中しているが，その数量や組成からみた規模は比較的小さく，石器製作作業の痕跡も乏しい。しかし，ナイフ形石器や彫器などが組成し，利用石材の比率では吉岡遺跡と同様の比率を示している。このことを踏まえ，両者の遺跡の性格として第一石材に台地内石材である硬質細粒凝灰岩を用い，より規模の大きな吉岡遺跡群Ｂ区では積極的な剥片剥離作業を伴う活動が行われ，小規模な用田鳥居前遺跡では製品としての石器を搬入し消費するという様相が捉えられた。そして，前者を石器製作作業の伴う拠点的遺跡，後者を一時的な移動先であるキャンプ地的様相を有している遺跡と仮定した。ここで特に注目できる点として，二つの遺跡間での石材比率が常に一定に保たれている点であると考えられる。

以上の分析から当該地域の石器製作における拠点的遺跡とキャンプ地的遺跡での段階的な作業工程と，等質的な石材利用の様相を捉え，相模野台地における砂川期という特定共時の遺跡を対象として，石材の消費戦略に焦点をあて当時の集団領域の検討を行った。その結果，台地内に広がる拠点遺跡とキャンプ地遺跡の段階的作業工程と石材組成の対応関係から，特定地域を拠点とした集団による遺跡間の連鎖的消費活動が行われた領域を推定した。

縄文時代後・晩期の墓制からみた集団関係
――愛知県を中心として――

文学研究科歴史学専攻　考古学研究（Ⅰ）専修　水　谷　璃　菜

1900年代から発掘調査に人骨の出土が多く見られるようになり，人骨収集ブームの到来により，人骨の発掘と記録を目的とした調査が加速した。とりわけ愛知県では，多くの石器時代の人骨が出土した渥美半島に大勢の研究者が訪れ，人骨の出土状況について大いに注目された。

本州のほぼ中心に位置する愛知県は西日本と東日本に挟まれ，どちらかの文化に含まれるか，両方の文化を併せ持つかなどが考えられるが渥美半島の三大貝塚と呼ばれる吉胡貝塚・伊川津貝塚・保美貝塚を始め，両者に影響を受けつつも独自の墓制を形成している遺跡がみられる。

特に注目できる墓制として盤状集骨墓があげられる。多人数の人骨を集めた集積墓は，意図的に積み重ねられた盤状集骨墓は愛知県，特に渥美半島・西三河に偏る。これらの集団はそれぞれに何らかの影響をし合っていたことがわかる。さらに盤状集骨墓の分布圏に土器型式を当てはめると，寺津式土器及び元刈谷式土器の分布圏と重なり，こちらも土器型式に偏りが見られた。

こうした分布による研究は多くの研究者が述べており，さらに遺跡内の墓を小群にわけてそれぞれの特性も指摘されている。埋葬小群のわけ方は研究者によって異なり，埋葬姿勢であったり，頭位方向であったり，抜歯型式である。これらの要素でわけられた埋葬小群から遺跡内の特性を読み解き，土器型式との組み合わせをもとにして，愛知県を中心に集団の関係を見たい。さらに愛知県渥美半島・西三河に見られる特殊な墓制である盤状集骨墓の分布とその伝播の手段を見つけることが本論文の目的である。

墓制は，人が亡くなって，葬儀を行い，それぞれの墓に埋葬するという目に見える行為と，死者との別れを惜しみ，死者が無事にあの世に行き輪廻転生を願い，怨霊となってこの世にとどまらないもしくは死者の蘇りを避けたいという目に見えない精神的なものがあるだろう。縄文時代における墓制でも目に見える行動の結果，精神的な願いとして考えを述べる研究者がいる。

しかし，考古学では，出土した“モノ”から実証できる根拠が必要とされる。遺構の配置などの状態から埋葬小群，出土した人骨から読み取る歯冠計測や抜歯型式の分布，ストロンチウム同位体等の分析が行われた。

その一方で，精神的な面への言及も行われており，縄文時代の人々の思考の中で生命は非常に重要視されており，その生命を生み出す“女性”という存在はとても重要な存在となっていたとされている。屈葬や人面把手付深鉢などがその象徴と考えられている。また，女性の象徴は土壙や土器そのものにもあると考える研究者もいる。さらに本稿で注目する合葬墓では祖先祭祀について言及がされ，祖先を埋葬することによって集団のモニュメントのようなものを作ったと考えられている。さらに，こうした集団墓地は帰葬の可能性が指摘され，集団への帰属意識を高めていたとされる。

以上のように，縄文時代後・晩期の愛知県の墓制において，土器型式及び，墓地が積極的に造営され始める時期が大きく二分されていることがわかった。

渥美半島・西三河と東三河に分けることができ，渥美半島・西三河では寺津式土器，元刈谷式土器，桜井式土器といった共通した土器型式を持っており，墓地が積極的に造営され始めたのは後期末からである。また，盤状集骨墓がみられる地域でもあり，一つの文化圏が形成されていたと言える。対して，東三河では稲荷山式土器が主流であり，墓地が積極的に造営され始めたのは晩期前葉からである。しかし，渥美半島においては晩期前葉から東三河との交流が確実にあったと考えられる稲荷山式土器が出土している。さらに歯冠計測の結果，稲荷山貝塚との血縁関係の可能性が示されており，通婚などの深い交流があったと考えられている。

以上のことから，⑴盤状集骨墓は寺津式土器→元刈谷式土器→桜井式土器まで一貫する土器型式を持つ遺跡で造られている。⑵大きく分けて，縄文時代後期末から晩期末にかけて愛知県は現在の蒲郡市辺りを境に西部と東部，渥美半島の３地域で構成されている点を確認した。⑶渥美半島は後期末から晩期末まで集団が生活を行っていたということから，渥美半島を中心に交流かあったのではないだろうか。そして，晩期前葉の段階で，それまで同型式の土器を持つ交流の深かったと考えられる集団同士の間で盤状集骨墓という特殊な墓制が広まったのだろう。と考えることができる。

連房式登窯導入期における鉄絵皿の分類と変遷

文学研究科歴史学専攻　考古学研究（Ⅱ）専修　伊　藤　真　央

現在の愛知県瀬戸市を中心とする近世瀬戸窯と，岐阜県土岐市・多治見市・瑞浪市・可児市を中心に展開する近世美濃窯は，いずれも瀬戸美濃大窯の生産技術を基に成立した窯業地である。近世瀬戸・美濃窯は大窯の生産段階とは異なり，各窯業地では村単位（地区）ごとに生産器種が異なることが明らかにされている。

そこで，本稿では大窯末から連房式登窯導入期を中心に顕著に認められる鉄絵の文様が描かれた長石釉の小皿，いわゆる鉄絵皿を取り上げ，美濃窯土岐川以北・美濃窯土岐川以南東部・瀬戸窯の3地域に分けて検討を行った。

第1章で1950年代に元屋敷窯の発掘調査が行われてから今日までの編年研究に関して近世美濃窯編年を中心に現状を把握し問題点を指摘した。近世瀬戸窯は連房式登窯の時期において地区ごとに生産器種が異なることから，地区ごとに生産様相が明確化され，編年が設定されている。しかし，近世美濃窯は村単位ではなく美濃窯全体での編年を考えているため，地区ごとに生産器種が異なる可能性を考える必要がある。近年の研究では，従来の編年に問題があることを指摘し，型式設定して編年を組み，段階設定が概ね明らかになっているが，十分に型式設定がされておらず，「窯式編年」から抜け切れていないというのが現状である。また，年代観では研究者ごとに齟齬があり，従来の編年に対する比較検討がされていない点が挙げられる。報告書では一部の器種について器形や文様による分類がなされているが，窯業地全体を通しての器形や文様の分類はされていなかった。

第2章では，当該期にて近世瀬戸・美濃窯で共通して生産が確認される鉄絵皿を提示し，近世瀬戸・美濃窯を大きく3地域に区分し，窯跡ごとに分類を行った。

第3章では，第2章で行った分類を基に鉄絵皿の型式組列を明らかにし，併行関係を求めるとともに，暦年代を比定し当該期における鉄絵皿編年を完成させ，地区ごとに生産期間をみていった。高台の形状が逆三角形の付高台から底部に面をもつ削り出し高台となり，体部の形状は全体的に丸みをもつものから次第に扁平化する傾向にあることから，a～f型式の6型式に分類した。各型式は時期差を示し変遷していくものであると考えられ，a型式が生産された時期を1期，b型式が生産された時期を2期，c型式が生産された時期を3期，d型式が生産された時期を4期，e型式がされた時期を5期，f型式が生産された時期を6期に時期設定した。今回行った編年に暦年代を比定させると，1・2期は慶長期前半に，3期は慶長期後半に，4期は寛永期前半から17世紀第2四半期に，5期は17世紀中葉に，6期は17世紀後葉に概ね相当することが推測された。さらに，生産期間は美濃窯で1期から5期に，瀬戸窯では3期から6期にかけて鉄絵皿の生産がみられた。

第4章では，鉄絵皿に描かれる文様の意匠が地域ごとに異なる可能性を考え分類を行い，鉄絵皿の意匠における地域差を明らかにした。鉄絵皿の文様は，圏線による分割により次の3類に大別される。A類は鉄釉の筆描きによる圏線で3分割されたもの，B類は鉄釉の筆描きによる圏線で2分割されたもの，C類は鉄釉の筆描きによる圏線が描かれないものに分類を行った。さらに，A類は文様の配置により5類に，B類は3類に，C類は4類に細分を行った。そして，細分された類型ごとに意匠を分類し，文様の変遷について時期ごとに整理した。それによって，A類は1期から3期，B類は2期から4期，C類は1期から6期にかけてみられる文様であることが明らかとなった。以上から，鉄絵皿は瀬戸・美濃窯ともに形状は同様に変遷する傾向にあり，併行関係も明らかとなった。また，文様は瀬戸・美濃窯とで同じ文様構成をもち，次第に統一化される傾向にあった。

今後の検討課題について以下の問題点が挙げられる。近世瀬戸・美濃窯では大窯での生産段階とは異なり，地域ごとに生産器種が異なることが指摘されている。しかし，鉄絵皿は各地域に共通して生産されており，当該期の瀬戸・美濃窯では共通した器種が生産される傾向にあるため，生産器種がどの時期から地区ごとに分業化が始まるのかという疑問が残った。

次に，織部製品など特殊品の位置付けである。当該期の様相を明確化させるには従来の美濃窯編年で重要視される特殊品である織部製品を検討し直す必要がある。近年の研究で，織部製品は土岐川以北の久尻地区を中心に生産されることが明らかにされているが，同じ土岐川以北の大萱地区では弥七田織部，土岐川以南東部でも織部製品がみられることが分かってきた。つまり，従来特殊品として重要視されたが，全体を通して織部製品を整理する必要がある。これらの調査・研究を行い，生産様相を明らかにしていくことを今後の研究課題としていきたい。

カルロス・ブロサンにとってのアメリカ

―― *America is in the Heart* を通して――

文学研究科英語圏文化専攻　英語圏文化研究（Ⅰ）専修　瀬　尾　健　喜

本論文は，カルロス・ブロサンの自伝的小説 *America is in the Heart* を通して，1910年代のスペインやアメリカの帝国主義的な統治下でのフィリピン人農民の状況や1930年代からの白人優越主義のアメリカにおけるフィリピン人移民の政治的，経済的，社会的立場を明らかにしようと試みたものである。この研究の特徴は，これまで日本でのフィリピン系アメリカ人の研究の中で行われて来た作家カルロス・ブロサン本人についてのいくつかの研究，そしてフィリピン人移民研究，さらにアメリカ＝フィリピン関係史の知見に基づき，ブロサンの作品 *America is in the Heart* の主人公アロスの経験を通じて，作家ブロサン自身にとってのアメリカとは何であったのかを解明しようとしたことである。

フィリピンは16世紀以降スペインの植民地であったが，1898年の米西戦争におけるアメリカの勝利を機にアメリカの植民地となった。そもそも，なぜフィリピンはスペインの植民地になったのか。その後フィリピンがアメリカの植民地となったことで，フィリピン人の生活はどう変化したのか。また，フィリピン人は自分たちの国がスペインやアメリカに支配されることをどう受け止めていたのか。さらには，アメリカ統治下になってさらに強い不満を持つようになったフィリピン農民は，どのようにして自分たちを搾取する人間と戦ったのか。この論文ではまずこれらの疑問の答えを探ることから始めた。

次に *America is in the Heart* では主人公アロスを通じて，1890年代のフィリピンの農民の苦しい生活状況だけでなく，20世紀初頭からアメリカへ渡ったフィリピン人移民の差別に苦しむ姿が描かれていた。実際に *America is in the Heart* の作者であるカルロス・ブロサンもアメリカ移民であり，この作品に描かれているフィリピン人移民の経験は，実際に経験した者にしか書けないものであると評価されている。本論文ではフィリピン人労働者がアメリカに移住した目的，フィリピンからアメリカに渡った移住者の数や就業実態，賃金，住居，生活について論じ，アメリカ社会でフィリピン系移民が受けた差別や迫害，そしてその背景を二次資料を通じて明らかにした。

America is in the Heart において，フィリピン人移民は，自分たちが移民してくる前に夢見てきた「善きアメリカ」と現実のアメリカとのギャップに苦しむ。そして理想のアメリカに近づくために，労働運動を通じて「民主主義」をアメリカの中に作り出そうとする。それはフィリピン系人のためだけのアメリカではなく，アメリカに住むすべての人間にとっての「善きアメリカ」であり，「理想の民主主義」であったといえよう。

カルロス・ブロサンらフィリピン人移民は，白人優越主義の中で偏見や差別を受けても，アメリカの中に民主主義は存在すると信じた。彼らは労働組合運動や市民権獲得のために努力を重ね，少しでも平等な社会に近づこうと努力した。カルロス・ブロサンにとってアメリカは当初，自由と平等の国とは真逆の社会であった。しかしながらブロサンは人種差別と搾取に苦しみながらも，アメリカ社会を否定せず，本を読み，できる限りの教育を身につけ，アメリカを内側から変革し，「理想のアメリカ」に近づけようとした。そして彼の書いた詩や小説は，アメリカ社会に受け入れられていく。ブロサンの物語は，その意味ではアメリカにやってきた多くの移民が最底辺から身を起こして社会に認められるという成功物語の一つともいえる。だからこそ，ブロサンの書いたこの作品は，アメリカ社会のネガティブな面を告発しているにも関わらず，人種や民族を超えて多くの読者の心をつかんだのだろう。そしてこの作品は，発表されて70年たった今でも，アメリカのマイノリティが直面する「現実」を今に伝える作品として，文学としてだけではなく社会史的な意義を評価され，アメリカの大学で必須のテキストとして使われているのである。

タイ華人
――国家への関わりと民族意識――

文学研究科英語圏文化専攻　英語圏文化研究(VI)専修　黎　　嵐　嵐

海外華僑華人は主に東南アジア地区に集中している。その中では，インドネシア，タイ，マレーシア3ヶ国で華僑華人の人数が多く，特にタイはASEANの中で唯一植民地支配されなかった国家である。歴史上には，華人に対してタイ政府から圧迫や排斥されることがなく，逆に積極的にタイ社会に受け入れられた。

第一章では，タイは古くから華商人が渡来し中国の朝貢貿易によって，良い関係を結んだ。タークシン王の頃，故郷である潮州を中心とする地域から大量の移民が流入し始めた。19世紀はじめ，中国の人口は急激に増加し飢饉，死亡と災害の被害により海外への移住の意欲が高まった。さらに，対外戦争や内戦が勃発し，ヨーロッパ勢力の侵略行為が移民の流れを促進した。後に反清運動の失敗に促され，一部の回族ムスリムがタイ北部に移住し，雲南華人がタイ北部へ移住の第一の波を形成した。中国共産党が勝利すると，国民党残党が境界を越えてビルマに逃れ，ミャンマーのシャン州での拠点から追い払われた後，野営を引き払いタイ北部に定住した。

第二章では，華商は徴税請負人により王室の称号や管理職が授けられ，華人官僚や資本家はタイ社会の封建制度を利用し，国家権力を握って裕福になった。ボウリング条約で王室の動きに左右された徴税請負人は精米加工に移り，恐慌で生き残った者はタイで企業を起こした。徴税請負人で莫大な資本金で大儲けした二哥豊は，徴税システムの解体によって，全財産を国庫に没収され，タイのため経済的に巨大な貢献したため，ラーマ6世から特赦を受け，「報徳善堂」を設立し，社会に慈善活動を行った。ピブーンソンクラームの「排華政策」により，新生代華人には華文を全く解さない人が増えている。彼の目的は華人だけではなく，タイ人も変えようとした。ピブーンの政策は華人にもタイ人にも伝わらなかった。

第三章では，タイの富豪の第一位のジャルーン・シリワタナパクディーは，小学4年で中退して物売りを始め，酒造会社勤務などを経て，酒造業や不動産などを手がける財閥を無一文から一代で築いた。第二位のタニン・チャラワノンは，改革・開放した後，CPグループとしてアグリビジネスなどによって中国全土に事業を展開し，バラエティーショーテレビ番組の「正大綜芸」の後援により，CPグループはより一層有名となった。第十位のタクシン・シナワット元首相は政治家として知られ，商売に専念する大財閥にとって特別な存在であり，元首相として実績が数多く残ったため，タイ政界に影響力を持ってきたタクシンはリーダー的な存在である。

第四章では，中国経済の減速にもかかわらず，格安航空会社のおかげもあり，中国人観光客数の伸びが牽引するとみられる。「泰中羅勇工業園」によって中国マネーのタイ流入が加速し，投資環境と資産の安全面から考えると他に匹敵するところがない。「一帯一路」構想も華商に新たなチャンスをもたらすことになった。新生代華人のほとんどは帰化し，タイ国籍を取得した。祖国として忠誠心を誓い，タイ名やタイ姓に変わり，根を下ろした。華語教育が制限を受けた時代があったため，華人3世・4世の中に華語を解さない人が増えた。華僑華人によって宗親総会のような大規模な同姓団体が結成されたのは，後続世代による華人文化継承と華人社会の持続的発展を願いつつ，同業団体と並んでネットワーク構成に重要な役割を果たしている。

タイ華僑華人とタイ原住民は友好的に付き合っている事と異民族結婚によって，タイ華僑華人のアイデンティティーに良い基礎を打ち込んだ。華商ネットワークを通じて，経済的に実力をつけると政治面でも力を持つようになった。

このように，タイの華人は中華文化を継承しながら独自の文化を形成し，巧みに融合したのである。

The Kālī Worship in the Kathmandu Valley

文学研究科英語圏文化専攻　英語圏文化研究(Ⅶ)専修　THAPA SHYAM KUMAR

While studying Hinduism from the viewpoint of the conflict between the great tradition and the little tradition, the Śiva worship is noticed to be a typical example of successful assimilation. Śiva, whose prototype was Vedic god Rudra, takes in *liṅga* worship (of the little tradition) on one hand and wins over the indigenous goddess worship on the other. As a result, Śiva worship becomes one of the two most predominant worships. The goddess Kālī is a deity under the umbrella of Śiva worship. She was almost an obscurity in the Vedic tradition as in the case of other goddesses like Durgā.

It is in the *Devīmahātmya* that Kālī first-ever showed her presence in the great tradition. It was compiled in fifth or sixth century and is regarded as the fundamental scripture in any of the goddess worships. In the *Devīmahātmya* the goddess Durgā is a heroine and Kālī and Mātṛkās are aids of hers in the episodes. Being characterized by the description in the episode, Kālī is depicted as a fearful, weird and bloodthirsty goddess. And Kālī has come to the Hindu scene of great tradition as such together with Durgā and Mātṛkās. (chap. 2)

Later Kālī was accomplishing the popularity through her association with Śiva as depicted in the *Purāṇas*. Moreover Kālī's fusion with the Tantrism made her more influential, so that she gained more recognition in the Hindu great tradition. Kālī dwelling in the battlefield and cremation ground is inevitably fused into the Kāpālika 'cremation-ground asceticism'. Within the context of this Kāpālika, the Kaura or Kālīkula tradition was developed and transmitted into the Kathmandu Valley as well as in Bengal. Kālī was worshipped as Guhyakālī or Guhyeśvarī in the Valley. (chap. 3)

In Bengal the devotional Kālī worship takes place. The goddess Kālī is a boon-conferring and, after all, the mother of all. She (=Mother Kālī) becomes the grantor of comfort and peace to her suffering children (=devotees). For Ramkrishna, for example, Kālī is Mā and a savior, moreover is the absolute being identified with Śiva. Thus in Bengal the benevolent, benign and motherly Kālī is more featured. The boon-conferring Kālī comes to be more popular and influential than the ferocious and blood-demanding Kālī. Consequently people are inclined to avoid the non-Aryan or non-Brāhmaṇic bloody sacrifice. That is to say, Kālī is the goddess in the great tradition, and moreover, is a supreme deity identified with Śiva. We find, in Bengal, that Kālī which was originally an indigenous and regional deity has come up to the highest being, i.e. Śiva. (chap. 3)

The Kathmandu Valley forms maṇḍala cosmos comprising center and periphrastic surroundings and retains the ancient mother-goddess worship. The goddess worship reached the Valley but indigenous part of things has survived to this day.

The folk or tribe śākta worship is popular. The professional mediums being possessed by Kālī or the Tantrists (=the practitioners trained and endowed with yogic power) play some important roles like healing diseases, shooting troubles. This is what the Brāhmaṇic tradition has ever rejected over the time. (chs. 4–5)

Kālī (=Guhyeśvarī) of Kālīkula tradition of Tantrism settled in the Valley and became the center of Kālī worship. The exoteric tradition is versed in yogic practices and fond of bloody sacrifices. People never feel out of place with the sacrifice. "Nepalese Hinduism is dressed in a robe of Āryan religious formation, retaining much of non-Āryan things in it." (by M. Tachikawa) (chap. 4)

In a word, Kālī worshipped in the Kathmandu Valley is a fearful and bloodthirsty goddess depicted in the *Devīmahātmya*.